



Title	京都に伝わる絣織：「いとへんuniverse」が提案するテキスタイルとしての西陣絣
Author(s)	白須, 美紀
Citation	デザイン理論. 2024, 83, p. 122-123
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93445
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

京都に伝わる絣織

「いとへん universe」が提案するテキスタイルとしての西陣絣

白須 美紀 京都女子大学研修員

はじめに

西陣絣は、全 12 種類ある西陣織の技法の一つである。西陣織は金銀糸を多用する帯として知られており、その中に絣織の技術が含まれていることを知る人は少ない。多くの伝統的工芸品の例にもれず、生産量は減少し続けており、昭和の最盛期に 130 軒あったといわれる絣屋は、令和 4 年現在、組合所属数が 6 軒までに減少。6 名いる職人の構成も、40 代が 1 名、70 代 1 名、80 代 4 名という状況で、深刻な後継者不足に直面している。

西陣織は分業化が進んでおり、絣職人の仕事は、1. 糸の防染、2. 組み替えやずらしによる経糸の模様づくり、3. ちきりの準備、のみである。ときおり絣のデザインを手がけることもある。絣職人が防染加工した糸を染めるのは糸染職人であり、ちきりに巻き終えた糸を織機にセットして製織するのは織物職人が行う。また、絣織布の企画・製造・販売・広報などはメーカーの領分である。このような分業下で仕事をするため、絣職人は自分が手がけた仕事であっても完成品を見ることはあまりない。

12 種もある技法のひとつであることや、職人の仕事に分業化されてしまっていることから、西陣絣の認知向上や後継職人の育成は極めて困難な状況にある。また絣織の一種としての認知度も低い。絹糸の西陣絣は木綿糸を使用する民藝としての絣と別ジャンルに捉えられており、絣織を紹介する書籍に掲載されることも少ない。

このような状況を踏まえて、発表者を含めたメンバー 4 名（西陣絣職人・西陣織の織物職人・染

色作家・工芸ライター）で西陣絣の魅力を伝え次世代につなげることを目的とし、2014 年に「いとへん universe」を結成した。それぞれの専門知識を生かし、オリジナルの西陣絣を製作するだけでなく、イベント企画や発信にも力を入れ、つくる・伝えるの両輪で西陣絣の認知向上を図ってきた。本発表では西陣絣を紹介し、西陣絣を使用したオリジナルの試作品を展示して、西陣絣のテキスタイルとしての可能性を提示した。

西陣絣の絣加工師の仕事

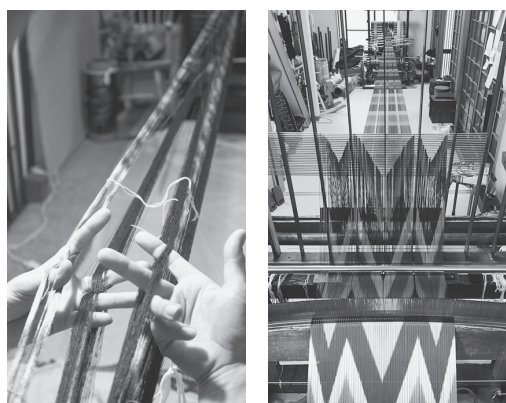
西陣絣の職人（絣加工師）は数反分の着物や帯を一度に作業する。以下が、基本的な仕事のプロセスである。

1. 糸の防染：布のデザインにあわせて設計図をつくり、糸を大枠（おおわく）などの道具に巻きつける。防染する場所に印をつけ、そこを防水加工された紙や自転車のゴムチューブの断片などで手括りし防染加工を行う。括った経糸は染屋に渡されて指定の色に染められる。染め上がった経糸が絣職人の元に戻ってくると、防染加工を解く。一色染める度にこの作業を行うため、糸は配色の数だけ絣職人と糸染職人の間を行き来する。

2. 経糸の模様づくり：染め終わった経糸は手で巻きとり、今度は太鼓（たいこ）と呼ばれる道具に巻きつける。反対側の端は自分の体に括りつけ、糸を指にかけて模様通りに経糸を並べ替える（図 1）。このときデザインに絣加工をしていない無地の部分があれば無地染の糸もはめこむ。糸の本数は仕上がりによって様々だが、数十～数百メートル

ルにわたる細く長い絹の経糸を、細かいものになると40cm幅の織物に4000本以上使用する。また、70cm～1m幅の織物になると1万本近くを数える場合もある。すべての経糸が順番通りに並んだらちきりに巻き取る。

3. ちきりの準備：糸をちきりに巻き取るときに「はしご」とよばれる西陣紉独特の道具を使い、経糸をずらして模様をつくる（図2）。はしごは可動式の細い金属棒が横棧になっており、経糸を少しずつずらして糸をかけると、その高低差でズレが生じて模様ができる。はしごにかける前は横段だった模様がはしごを経て矢絣などの模様に変化する。デザイン通りに経糸を巻き取ったちきりを織屋に渡して紉職人の仕事は終わりである。



（左）図1 職人の手で経糸を並べ替える
（右）図2 はしごを通し、横段を山道模様に仕上げる
（図1・2共に、葛西紉加工所）

西陣紉のテキスタイルとしての可能性

プリント布が大勢を占める現代においても、事前に色を染めた経糸と緯糸が交差する西陣紉のような織物には一定のファンが存在している。それは和装だけではなく洋服生地やインテリア用の布地においても同じである。通常、織物は単体の色糸を織り成して模様をつくるが、紉は染め分けた1本1本の糸を組み合わせて模様を表現する染物と織物のハイブリッドのような存在である。さらに西陣紉は糸が細く繊細な模様をつくり出すことができ、はしごを使って大胆な模様をつくり

出すこともできる。

いとへん universe ではこうした西陣紉の魅力を生かし、手織りと機械織りでオリジナル布を製作してきた。これまでに、洋服やバッグ、ブックカバーなどの試作品の製作・販売を行ってきた（図3）。コットン素材の西陣紉にも挑戦したが、西陣紉は技術も道具も絹織物のために発展してきた技術であるため、素材を木綿糸に変えると紉加工や糸染でトラブルがおき生産効率が悪くなってしまうことが分かった。他方、紉の経糸は絹でも、緯糸を無地の木綿やウールにすることで、シルクコットンやシルクウールといったアパレル向けの布に仕上げるができる。また、本来の用途である和装に関しても、ユーザーが求める魅力的な意匠を表現できれば「現代の着物」としての展開を打ち出すことも十分に可能である。



図3 いとへん universe 試作のクラッチバッグ

手仕事によって生み出される西陣紉は大量生産品と比べると製作に時間がかかり、価格も高価にならざるを得ず、一般の布との競合は難しい。現代の布でありながらも、伝統工芸品としての価値や歴史を持っていることを最大限に生かした展開が必要となる。そのため、付加価値を高めながら、デザインや販売スキルを持つステイクホルダーとの協働、いとへん universe の活動を通じたコアなファンづくりなど、新たな価値創造とアートマネジメントにも力を入れていくことが重要である。